

中世英詩「梟とナイティンゲール」(1)

関 本 栄 一 訳 註

Japanese Translation of “The owl and the Nightingale”

- 1 私は¹⁾、初夏の陽の照る奥深い谷間にいて、梟とナイティンゲールと
がいさかいをしているのを聞いてました。
- 5 その口論は、時には穏やかで、時には大声でしたが、大変にすさまじ
いもので、二羽の鳥はお互いに腹をたてむかむかしあい、敵意にみち
た気持ちをむき出しにしました。その上、お互いが知り合っているあ
10 らのうちでも最も悪いあらについて云い合い。とりわけ彼等がひどく
論じ合ったのは、お互いの声（歌）についてでした。ナイティンゲ
ールが谷間の片隅で弁じ始めました。
- 15 その時、ナイティンゲールは、まさに花の咲きこぼれん許りの一本の
枝にいました。——その枝は、葎やすげが、いりまじっている、淋し
い生垣の中にありました。その枝ぶりのために、大いに楽しくなって、
いとも巧みに楽しく歌い始めました。
- 21 その楽しげな調べは、他の楽器よりはむしろハーブが^{ハープ}横笛からながれ
でてくる音のようで、まるで己の咽喉^{のど}から発している声ではないよう
に思われた。
- 25 その時、近くの古い切株に、梟がたっていました。この切株で、彼
は「夕の歌」^{ホラ・カノニイカ} 2) を唱ずるのを習慣としていました。この切株は葛で蔽
われていまして、これこそ梟の棲家でした。
- 29 ナイティンゲールは、眼をこらして梟を眺めて、悔り、見下げ果てた
奴と思った。というのも、人々が梟のことを胸糞の悪い、嫌な奴だと

考えているからです。

33 ナイティンゲールは、

「ばけものめ！飛び去れ！（失せろ！）私やお前さんをみると余計気分が悪くなる。本当にお前さんの醜いご面相をみると、しばらくの間、歌をやめてしまうことが、ままあるんだよ。お前さんが近よってくると、気持もそぞろになり、鳴き声もよどむんだよ。お前さんの恐い声を聞くと、なろうことなら、私や歌ってるより唾でも吐いてた方がましだよ。」

41 この梟は、夕暮になるまでこらえていました。そうすると、心は、息切れのするほどに、怒にもえたぎっておりましたので、もはや黙っていることができなくなって、日暮後に長いこと意見を述べました。

46 「さあ、お前は、私の歌をどう思うかね。お前は、私が声をふるわしてはなやかに歌うのを知らないからといって、私が歌い方を知らないと思いなさるのかね。屢々、お前は私を怒らせ、私に小言を云つたり、ひどいことを云うね。もしも、お前を私の足下に組伏せて、一そうありたいんだがなあ！—その上、お前を枝から追放したら、お前はきつと他の調子で（悲しげに）歌はなけりゃなるまいって。」

55 ナイティンゲールはこれに答えて云いました。」

「私が、この葉の茂ったしげみのなかにかくれ、広々とした野原に飛んでゆかない限り、私やお前さんの挑戦なんかに、ちっとも驚きやしないよ。とどのつまり私が自分の生垣の内にふみとどまっている限り、お前さんが何と云おうと、とんと意にかいさないね。お前さんから逃げられないものに対しては、お前さんが残忍極まる奴だということを私や万々承知してますよ。お前さんは意のままに、自分より小さな鳥には威張りちらし、手ひどく扱っている。

- 65 このために、あらゆる鳥が、お前さんを嫌い、攻めたて、追い出し、金切り声で毒づき、お前さんにつきまとって離れないんだようといったわけで、四十雀でさえも、心からお前さんをずたずたに引裂きたがってるんだよ。
- 71 お前さんを眺めると気に障るし、多くの点⁸⁰で、お前さんはいまいましい奴さ。お前さんの胴体は短かく、頸は小さく⁴¹、頭は胴体より大きいし、両の眼は漆黑⁸²で、大きく見ひらいていて、恰度たいせい（大青）で彩られたようだよ。お前さんは、自分のけづめでもって打敗かすことができるようなものを、喰いつきたいかのように凝視する。お前の嘴は、強靱で鋭く、鉤をもっていて、恰度曲った突錐⁸³のようだ。
- 81 この嘴でもって、屢々長いことペャペチャしやべっているが、それがお前さんの歌の全部じゃないかね。しかも両方のけづめでもって、私をこなごなにしておびやかしていなさるが、水車小屋の齒車⁷⁷の下に棲んでいる蛙が、お前さんには私なんかより一層似合いの御馳走だよ。蝸牛、ねずみなどのきたない生物^{いきもの}が、お前の本来のびったりした食物^{くいもの}なんだよ。
- お前さんは昼間は身を潜め、夜になって飛び回るが、これによってもお前さんが化物と分るんだよ。
- 91 お前さんは憎むべき、けがらわしい奴だ。（不潔な奴だ。）私やこのことについては、特にお前さんの巣とけがらわしいひな鳥を引合いに出して云ってやるよ、お前さんはひな鳥に大変きたない食物を食わしているね、そしてひな鳥が巣の中で何をしているか御存知なんだね。奴等はおごまで深くはまり込んで巣を汚し、恰もお盲さんのように身をひそめているんだよ。

このことについて、世間では次のような喩話をもって云っている。

『巳が巢を汚す動物は不幸をいだいている⁸¹。』——（巳が巢を自ら汚す動物に呪あれ！）

- 101 昔々⁸²、一羽の鷹が卵を生んだ。ところが、鷹は少しも自分の巢に注意を払わなかった。ある日、お前さん（梟のこと）は、巢の中にしのびこみ、お前の汚らしい卵を生んだ。たまさか、鷹は卵をかえし、自分の卵に新しき生命をもたらした。そこで鷹は、自分のひな鳥に餌を運んできて、巢をながめ、ひな鳥が餌を食^はんでいるのをじっと眺めていた。傍に離れていたが、鷹は、自分の巢が、外側が汚れているのに気がついた。

- 110 ひな鳥に腹を立てた鷹は、怒声でもって声高く叫んだ。

「一体全体、誰がこんなにしたのか云いなさい！ あんた達は、生れつき、こんな間違いをしでかすことはないのだ。あんた達に対して、この仕業は何というまいましいやり方だ。若しあんた達が知つてるなら、誰だか云ってごらん！』

そこで、ああだ、こうだと云っておりましたが、（一羽がこういうと、他の鳥はこうだと云っておりました。）

『本当を云えば、こんなことしたのは、あちらにいて、大きな頭をもっている私達の兄さんなんですよ。ああ、彼奴が死なないなんて！ 何ともはや残念なことだ。もっともひどい仕打で、奴を追い出すなら、きっと首ねっこをへし折ってしまうんだがなあ。！』

- 123 鷹は、ひな鳥の云うことを信じて、ひな鳥の中から、汚らわしい鳥を掴み出し、野生の枝から投げ出しました。と、そこらにいたかきさぎや鴉が引發いてしまいました。このことについて、人々は、全く完全というわけではないが、十二分な戒めをしています。

- 129 このようなのはしたなき生物のように、その生れ卑しくして、生れ^{たふ}貴きものと共にいる者は、自分の生れを常に人目にさらすものだ。つまり、いとも貴き巢に育くまれたとはいえ、腐った卵から成長したのだ。林^{りん}檣は、それがなっているところから転がり落ちようとも、またそこからもぎとられようとも、何処よりきたれるものか、をよく人目に分る¹⁰⁾ものだ。』
- 139 ナイティンゲールは、このように答え、しかも長いこと論述してから、ちょうど人間がよくなりひびくハーブをびんびんかきならすように、大変声高に鋭く歌いました。
- くだんの梟は、彼方の方で、この言葉にじっと聞きいり、眼を伏せて、ちょうどたった今、一匹の蛙をのみこんでしまったかのように、憤怒に胸をふくらませて坐っておりました。といいますのも、彼女はナイティンゲールが彼女自身をなぶりものにして歌っているのに充分気付いていました。とはいうものの、彼女は次のように答えました。
- 150 「何故、お前は野原に飛んでいって、われわれのうち、どちらが冴え^{かんば}た色をしてすばらしい容貌をしているか、くらべようと思わないかね。」(するとナイティンゲールはこれにこたえて)
- 「いや! とんでもない。お前さんは鋭い爪をもっている。私や万が一にもお前さんから爪で引搔かれることなんか毛頭望みませんよ。だが、お前さんは鷹のような強靱な爪をもっていて、それでもって、ちょうど、私を火箸がものをさはさむように締め殺すつもりだね。お前さんはね、お前さんの仲間が思いつくように尤もらしい言葉を弄して、私を欺むこうと考えていなさるんだね。
- 159 おっと、私やその手にゃのりませんよ。私ゃ、あんたが誤った助言をなさってるのを百も承知ですよ。腹に一物ある御忠言なんておよし

よ！ お前さんの悪企みなんかすっかりばれているんだからね。お前さんの二心を露顕せぬようかくし、疚しい気持が正しい気持にかくれて分らぬようになさいよ¹¹⁾。

165 お前さんが悪賢くたちまわりたい時には、人目につかぬように注意なさいよ。というのも、悪企みは、その目的が他人様にはっきりと分るなら、ただ自分の身に恥しい思いと、人様から憎悪の念がふりかかってくるだけからね。お前さんのそんな手ちやうまくやれないよ。私や慎重居士だから、かたすかしをくわせてやるさ。

171 お前さんのずぶとさも、目的を果すのにはとんと役に立たないよ。ありていにいえば、お前さんが腕力は強くても、お前さん以上に、私や悪知慧を働かして戦つてやるからね。その上、この私のとまり木は間口、奥行とも砦^{とりで}にもつこいなのだ。¹²⁾ また、聖賢も¹³⁾『巧みに飛翔するものは、巧みに戦う¹⁴⁾。』とっておられる。

177 だが、もうこんな口喧嘩はやめよう。こんな口論は何の役にもたたないからね。そこで、私達は正しい判断にもとずいて、丁寧な穏やかな言葉で始めようよ。たとえ私達は折り合えなくても、喧嘩したり、屁理窟をこねまわさないで、真剣な、筋道の通った相応^{ふさわ}しい言葉でもってうまくやれるだろう¹⁵⁾よ。そうすれば、各々筋道の通った理性に適った云いたいことが云えるだろうよ。」

187 梟は、このナイティンゲールの言葉を聞いて、「だが、一体誰が我々と和解させ我々の云い分を聞いて我々の間に正しい判断を下して下さるかね。」と云いますと、ナイティンゲールは、「私は、そのことについて議論する必要のないことをよく知っています。そのお方こそ、ギルドフアードのニコラス先生¹⁶⁾です。このお方は言葉づかいに気を配り、物事の判断をお下しになるのも慎重で、あらゆる悪徳を憎まれる

のです。さらに、先生は歌に御造詣が深く、上手に歌うもの、下手に歌うものをよくお知りですし、物事の正邪、表裏を明瞭に区別なされます。」と答えました。

- 199 梶はしばらくの間、この答をじっと考え込んでおりましたが、遂に次のように答えました。

「私はあの方が御判断して下さることに異存はありません。あの方は、昔は荒々しい気質の方で、ナイティンゲールや、温和しい小さな生物¹⁷⁾をお好きでいらっしやったかもしれないが、今ではとうに熱もさめてしまわれたことを知っております。昔の誼みで私をおとしめてお前の味方をするようなことはなさらないだろうよ。お前さんは、あの方の気持をお喜申上げられないから、お前さんのために、不公平な判断を下されるようなことは決して心よしとなさらないだよ。¹⁸⁾ 今ではあの方も、分別盛りの沈着な方だから、どんな欺瞞もあの方の注意をひきはなしたいよ。あの方はもはや放縱不きな生活を喜ばれないので、きっと公明正大な方法をとられるさ。」と。

- 215 この間、ナイティンゲールは答える用意をしておりましたが、彼女の機知の種の出所は多方面にわたっておりました。彼女は、「梶めツ！嘘をつくな！ お前さんは何故悪者のように振舞うのかね。お前さんは夜歌い、昼間は歌はないね。しかもお前さんの歌は悲歎の歌（哀悼歌）で、お前さんの大声の叫びは、夜中に、聞く人をして恐れさせる。お前さんは、聞くに恐しいような声で仲間に向かって叫び、ホーホーと鳴きかけている。それだから、人間様一賢い人にも愚かな人にも¹⁹⁾—には、お前さんが歌っているのではなく、歎き悲しんでいるのだと思われるくらいさ。

- 228 それから、お前さんは夜飛んで、昼間は飛ばないね²⁰⁾。このことに私

や驚きあきれていたが、成程御尤もなことだね。というのも、正しいことを避けるものは暗黒くらくを愛し、光明あかるを憎むからね。そして、悪行を好むものは、その行為を果すために暗黒が好きなんだよ。洗練されてはないが、(上品ではないが) 成程賢い諺があるね。人々の口の端にのぼり、アルフレッド大王様も書きとどめられている。

『人は、自分のことを邪悪な奴だということをよく知ってる人達に近寄らない。²¹⁾』とね。

237 まさにお前さんに当てはまると思った。何故なら常々お前さんは夜飛んでいなさるからね。さてと、考えているともう一つのことが心に浮んでくるよ。お前さんは夜になると視力がはたらき、昼間はお盲さんだから、林も小川も見えないんだ。²²⁾ このことについて、人々が喩話をいっている。

245 『梟は、全然まともにもものを見ないし、誰もが彼を欺けないほど、心の中に悪たくみを抱いている奴と同じだ。そんな奴は暗黒の道(邪の道)をよく知っていて、光明の道(正しい道)をさけるのだ。²³⁾』と。このようにお前さんの仲間は正しいことに少しも注意を向けないのだよ。」といいました。

253 梟は、この長口舌をじっと聞きいていましたが、ようやく口をきりました。

「お前さんはナイティンゲールと呼ばれているが、おしやべり鳥と呼んだ方がお前には一層適切だろうよ。何故って、お前はおしやべり過ぎるよ。さあ！お前の舌を休ませろ！ お前は丸一日中がお前のものと思ってるのかね。さあ、今度は私の番だツ！ 黙って私にしゃべらせろ。私やお前に恨を晴らしてやるよ。そこで、私が何の苦もなく、理窟の通った言葉で、いかに云い開きできるかを、耳の穴をほじくっ

てよく聞け。

- 265 さて、お前は、私のことを昼間身を隠しているというが、私もこのことを「肯定」も「否定」もしないよ。だが、よく聞け、お前にその訳を話してやる。一何もかもすっかりその訳をな。

私や強靱で頑丈な嘴や、鋭く長い爪をもっている。一ちょうど、禿鷹が本性にぴたりとあっている嘴や爪をもっているように。私や自然に適合して生きてることは喜びであり楽しみでもあるのだよ。それに、このために誰も私に害を与えないのだ。私には、自分が自然の法則によって大変強いのだということがはっきりと分るんだよ。ところが、これこそ地面すれすれに飛んだり、繁みの中を飛んでいる小鳥達が、私を憎悪する訳合だよ。そこで奴等は私の周囲で囀っている時、私に對抗すべく叫んで仲間を呼び寄せるんだよ。

- 281 だが、私や休息して静穏に私の巣にじっとしていたんだよ。²⁴⁾ 何故って、私が叱ったりどなったりして、あるいは羊飼いが用いるような下卑た言葉をいって、奴等を追払ったとしても、それだけ、私がよくなるなんてこたあないんだからね。それにまた、心の悪い奴等に向って下品な言葉を浴せかけたくないの、奴等と遠ざかっていたいんだ。

- 289 ここに賢人の見解があり、人々はそれを屢々口に云っている。(人々の間によく流布していること)——『馬鹿者に腹をたてたり、かまの口と競争して大口を開けても仕方がない。²⁵⁾』と。又、私はアルフレッド大王様が、或時、次のように申されたのを伝聞しました。

『^{あざけり}嘲弄と空威張りが幅をきかすような場所におるな。馬鹿者共は喧嘩させておき己は去れ。²⁶⁾』と。さて、私もアルフレッド大王様のよう
に賢いので、大王様の云われることは正しいと思うよ。また、大王様は、他日は、一般に知られている諺を云ってらしやる。

『汚ないものに手を出すものは、決して汚れないではすまされぬ。(朱に交われば赤くなる。²⁷⁾』とね。

- 303 お前さんは、鴉が沼地の傍で、鷹に向ってカアカアと叫びつつけ、鷹にまさにちかからんとするかのようには叫声をあげて近づいてゆく時、鷹は鴉より余程馬鹿な奴だと思いだね。ところが、鷹はここで賢明な忠言（諺）に従って、飛び去り、鴉にカアカアいわせておくんだ。
- 309 ところで、お前さんはもう一つのことで私を責めていなさる。お前さんは私にゃ歌らしい歌一曲だって歌えないで、しかも唯一のテーマは哀悼歌で、その歌たるや聞くものをして恐しくさせるのだと。このことは全く見当外れだ。私や立派な高い調子でよどみなく歌うよ。お前さんは、御自分のきーきー声と異なるすべての歌を恐しいものと考えていらっしゃるね。
- 317 私の調子についていうなら、堂々としていて決して弱々しくない。まさに大きな角笛を吹いた時の音なんだよ。それなのに、お前さんののは、未だ成熟してない草でつくった小さな笛を吹くときの音だね。私の歌い方は、お前さんのより全くもってうまいもんだ。お前さんは、ちょうどアイルランドの坊さん²⁸⁾のようにペチャクチャしゃべっているんだね。ところが、私や、夕方になると定め^{とき}の刻に歌い、次は就床の時刻に、三度目は真夜中に歌い、更に、いま一度、夜の明け初めか、明けの明星（金星）が、遙か彼方より昇るのをみた時に歌うんだよ²⁹⁾。
- 329 かように私や己が歌で人々のお役にたち、人々に好都合になるように予報しているんだよ。ところが、お前さんは陽の目の明るい夕方から丸一晚中歌っておいでで、夜が長ければ、それだけ長く、いつもお前さんの歌を一本調子で歌っているよ。お前さんは、憐れっぽい叫声をやかましくつつけて決して夜も昼も休むことがないね。

337 お前さんのかんぱした声を、お前さんの棲んでいる近隣の人々の耳にひびかせるで、お前さんの歌を安っぽくさせ、皆が歌の価値を認めないんだよ。というのも、すべての楽しみとは、人々に飽きられない程度の長さつづけられたいものだ。たとえ横笛^{ヘーブ}や風笛^{バイブ}をならすにしても、鳥々の囀る声にしても、もしそれが余り長ければ飽きられ嫌われてしまうものだよ。

345 歌というものは、たとえそれが心地よいメロデーでも、適当な時間をこえて長くつづけているならば、全く嫌われてしまうだろう。何故ならこのことは真理だから——アルフレッド大王様も云っていらっしやるし、諸々の本にも書かれてあるからだ、——『すべてのものごとは、度を過すと却ってその真価を失い勝ちなものだ。³⁰⁾』と。

353 お前さんは、楽しさに飽きあきしていなさるんだ。そして飽きてるために人々に嫌忌の情をもたらすんだよ。³¹⁾ それだから、人がもし常に同じ状態でいるならば、すべての楽しさは、はかなくたち消えてゆくものなんだよ。——ただ一つの例外がある。それは神の国だ。そこは何時も変りなく甘美な国だ。たとえお前さんが天国の籠から「楽しみをとり出したとしても、その籠は常にあふれる程一杯なんだよ。常に与えても常に同じ状態になってるのは、神の国だけの神秘なんだよ。

365 しかして、お前さんは今一つの恥をあばいていなさるね。即ち、私が眼に欠点があるということだ。で、そのために私は夜飛び歩くことができ、昼になると見るができないとおっしゃってるんだね。だが、お前さんは嘘をついてるんだッ！ 私はすばらしい視力をもっているということは明白なことだ。お前さんは、私が昼間飛べないからといって、私が見ることができないとお考えかね。

373 野兎は一日中じっと身を穩しているからといっても、奴さんは眼がき

くんですよ。若し、狽犬が彼に偶然にも襲いかかると、彼は逸早く、狭い路に沿ってあちこちと方向を変えながら進み、彼の考えていたトリックを巧く利用し、ちょうど穽れ場所え進んでいくように素早くピョンピョン跳びながら逃げ去ってゆく。彼の眼が弱いにもかかわらず、眼ではっきりと物をみるのでなければ、こんなこともできよう筈がないだろう。

383 ところで、私は昼間は坐って人目を忍んで潜んでいるというものの、野兎のように事物をみることができんだよ。勇猛な人々は戦場に赴くと縦横無尽に活躍し、多くの敵方の人を突きさし、夜は夜で、危急の場合には、勇猛果敢な行動をするが、そんな時、私や彼等について回り、夜になると歴戦の勇士の間を飛び回るのだよ。³²⁾」 といいました。

391 ナイティンゲールはこの答を心に留め、長いこと、如何に答えるべきか思をひそめていました。が、梟が彼女にむかって筋道の通った理窟と好判断をもって述べたことを論破することができそうにもなかったし、自分が余にりも論争をひろげすぎてしまって、応答が間違っていたのかも知れんと思った。にもかかわらず勇敢にもしやべり出した。何故ならば、勇気をもって、自分の敵にしかと真正面から直面し、不面目にも敵から逃れないことこそ賢明であるからだ。また、万が一にも服従すると、服従しようとしている者も、勇敢になるものだ。もし敵が奴は臆病者でないと知ると、敵は去勢してない豚から去勢された豚になるだろう。(彼は元気さ、勇敢さを失ってしまうだろう)。こう考えてくると、ナイティンゲールは、勇気を挫かれたが勇敢にも話し出した。

411 「梟めッ！ お前さんは何故そんな口幅ったいことを云うのかね。冬の

間、哀れっぽい歌を何時もペチャペチャ云うくせに。お前さんの歌は、雪の中で悲歎にくれて、コッ、コッ！と鳴いているめん^{めんどろ}鳥の鳴声そっくりだよ。冬には、お前さんは腹立たしげに悲しげに歌い、反対に夏になると、お前さんは、いつもだんまりしてしまうね。お前さんが私達と一緒にあって喜び合えないのは、お前さんの腹にある嫉妬心からきてるんですよ。というのも、幸福がたまたま私達のところえやってくると、お前さんは嫉妬心に胸ふたがる思をおこすからですよ。

- 421 お前さんは、——野卑な人間にとっては、あらゆる幸福は腹立たしいものなんだが——野卑な人間のように振舞っているんだよ。そして、万人が幸福であることを知ったら、ぶつぶつ云い、眉をひそめて、自分のところえも幸福が早くやってこないかと思ってるんだ。また、お前さんは人々の眼に涙溢れるのをみたいと願ってるのだ。ちょうど、羊毛の束が頭髮とからんでも、つゆ知らぬ顔をしている意地悪い輩^{やから}と同じだ。³⁸⁾ お前さんは、こんな風に振舞ってるんだよ。——つまり、雪が深く一面に降りつもり、生きとし生きるものが難渋している時、夕暮から夜明まで歌ってるんだ。

- 433 ところが、私ゃすべてのものに幸福をもたらししているんだよ。生きとし生きるものは、私のお蔭で喜んでいるんですよ。私のやってくるのを喜び、やってくる前から待ち望んでいるんですよ。草花は、その芽を出し、樹々の間、また、牧場においても開き始めるのです。百合は、一御存知のように一美しい色彩^{いろどり}をもって私を迎えてくれ、美しく飾つた彼女は、私に自分のところえ飛んできてくれと願うのです。ばらは一美しく薄化粧をして、とげのある小枝の間から覗いているのですが——自分のためにやってきて歌（民謡）を聞かせてくれと願うのです。

447 そこで、私や昼夜を分たず歌ってやるんですよ。私が歌えば歌うほど、
それだけ、彼女に喜びの歌を与えてやることのできるんですよ。だから
といって、私の歌は決して長すぎるというんじゃないんですよ。と
いうのは、私や人々が喜んでいるのを知ると、快楽に飽き飽きさせる
ことは嫌ですからね。私やそんなような場合、分別を働かして飛び去
っていくんです。

455 人々が刈入れのことを考え、薄暗き秋がきて、樹々の葉末が色づき始
めると、私や家路さしてゆき、さよならをします。私や冬になって
^{そこな}害われるのを欲しませんからね。私や厳しい季節が近付いてくるのを
知ると、家路を辿ります。私が、あちこちで、皆のために骨を折っ
てやったことに対する皆々様の私への愛情と感謝の念を懐きながら。
私や私の仕事が終わってしまってから、どして残ってる必要がありますし
ょうか？ 何という理由で？ 人間様だって、己が不必要となつた場
所にぐづぐづしているようなずるがしこさと不見識なんかもちあわせ
てないからですよ。」と。

467 梟は、立板に水を流すように次から次へとでてくるこれらの言葉に一
言々々じっと聞き入り、頭にたたきこんでおきまして、筋道の通った、
もっとも適切な答を如何にして見出すかを考えていました。何故なれ
ば、策略的な申開きを恐れるものは、常に充分自身で考えてみなけれ
ばならないからです。遂に、梟はいいました。

「お前は、私に何故冬になると歌い叫ぶかとお尋ねだね。人々が彼等
の友人を愛しいつくしむ、時には彼等と共々喜びながら、家での食事
時には楽しく親しげに語るのは、此の世の始からあったこと、人間様
の間では極くあたりまえのことなんだよ。特にクリスマスの時はそう
なんだよ。その時には、富めるも、貧しきも、貴賤を問はず、夜も昼

も各々舞踏歌³⁴⁾を歌いますよ。で、私や彼等を助けるために、できるだけのことをするんです。

486 しかし、私は華やかに時を過したり、歌ったりしている他に考えているんです。さて、私は卒直に適切な御返事を申し上げます。(私が冬季歌うというのは)、初夏は全くいやらしい季節で、人々の考えを誤らせ、淫らなこと許り考えさせるからです。つまり、人々は何事についても、きよらかな面を考えず、淫らなこと許り考えてるんです。どんな動物も、欲望を自制することなく、横道えと足を踏み入れています。馬小屋につながれている牡馬でさえも、雌馬を欲するために、野性的に荒々しくなっているですよ。お前さんといえども全くもって同じだ。というのは、お前の歌は淫蕩で、ちょうど交配期直前のように、あだっばい。お前は思い通りに番えたら、一言もいえなくなって、四十雀のようにクックッとしゃがれ声で鳴くね。

505 それどころか、お前の声はかやくぐりの声より悪くなるんだ。一例の庭の近くの切株の間を飛んでいる。つまり、お前のお楽しみ(欲情)が終ると、お前の鳴声もおしまいさ³⁵⁾。

夏になると、下卑た連中は己を失い、気が狂ったように暴れ回る。が、それとて真の愛情を求めてではなく、むしろ気狂いじみた一時的な衝動にかられてるのだよ。だから、目的を達してしまうと、欲情にかられた荒々しさはなくなってしまうし、愛情感はとても永つづきはしないんだ。

517 お前の心がまえも全く同じさ。お前も抱卵する(巣ごもる)ようになると、お前の調子は全くくづれてしまう。小枝にいてもお前は同じように振舞う。つまり、お前は、お楽しみをおわると、歌声がくづれてしまう。ところが、夜が段々長くなって、その長い夜が、森に冬のき

びしさをもたらすようになると、そういう時にのみ、活発で勇敢な者が、何処にいるかが分ってくるのだよ。

527 苦難の時節においてこそ、物事を仕遂げる人と、尻込みして引込んでしまう人とはっきり分るんですよ。人は、まさかの時にこそ困難な責務をふり当てる人を見分けることができるのだよ。こんな時にこそ、私ゃ活躍し戯れ楽しく歌うのだよ。——自分で詠唱を楽しみながら。

534 私ゃ冬なんかちっとも気にかけないよ³⁶⁾。私ゃひよわな生きものじゃないからね。私ゃむしろ無気力のものの心を慰めるんですよ。そういったものたちは、不安な気持ちを抱き、また憐れなものなので、心から温情溢るものをこいのぞんでいんですよ。私ゃ彼等の心の苦痛を一層少くしてやるために、彼等のために歌ってやるのです。それ！どうしたかね。反ばくをしないかね？

註

- 1) 191 行目にギイルド・フアド (Gnildford) のニコラス先生に論争の結末をつけてもらおうとナイティンゲールが云っているが、このニコラス先生のことであって、批評家、編者、校訂者により、この作品の著者であろうと云われている。が、Wills の言をここではひいておくことにし、この作品の解説により詳細に検討することにしておく。

「著者の名前が誰であろうと、少しも重要なことではない。つまり本当に重要なのは、彼の人となり、心情並びに思想であり、人生並びに芸術に対する態度である。」

- 2) ホラ・カノニカ (Hora canonica). 323 行から 328 行にかけて、梟が自分の鳴く時間を云うところに出てくる。教会法によって定められた祈りの時間を云う。アイリーン・パウァ女史の著「中世に生きる人々」の第3章、マダム・エグランティーンに詳細な説明がある。
- 3) 「多くの点で」というところを、Grattan 氏などは 'to a high degree' と解釈している。
- 4) 原文は、'The body is short, the swore is smal' となっているが、H. B.

Hinckley 氏は ‘body’ と ‘swore’ の位置を換えれば、意味がもっと充分に把握されると述べている。

- 5) 「眼が漆黒でぎらぎらしている。」とナイティンゲールが、梟のことを云っているが、梟の問いや答に現われた性格の一端を窺うのに興味深い描写である。チョオサーの赦罪状売り僧は、「野兎のようにぎらぎらす眼」をもっていると描かれているが、中世の観相術によれば、謙遜な態度に欠けているものようである。
- 6) 肉屋で用いる、殺した豚などをつるしておく鉤のある錐のこと。
- 7) 「水車小屋の歯車」の下は、蛙の棲家であると、昔から見なされていた。
- 8) この諺は用例が多々ある。「どんな鳥でも自分の巣は汚さない。」「内の恥は外に表わさぬ」等々。尚、シェクスピアのお気に召すまま」の第4幕、第1場、216 行目にも同じような諺が出てくる。
- 9) ここの物語りは、フランスの中世の女流詩人マリー・ド・フランス (Marie de France) の「鷹と梟」の話より引用されたものである。その他、アングロ・ノルマン語でかかれた、Nicholas Bozon の詩にも出てくる。
- 10) 林檎^{りんご}のところの比喻は、要するに次のようなことになる。
 「卑しき生れの人々にとっては、次のようなことが共通している。つまり、高貴なる身分についたり、宗教を教えられたり、上流社会に出たり、或いは立派な肩がきをもっても、常に自分等が生れた地位とか本性にたちもどるものだ。」したがって英語の諺でも次のようながある。
 “Trendle (=may roll) the appel nevere so fre, he ecnyes fro what tree he cam.”
- 11) ナイティンゲールの梟に対する忠告つまり「疾しい気持を隠しなさい」というのは、皮肉で云ってるのである。
- 12) 結局、「私のとまり木に、あらゆる点からみて、いとも立派な岩をもっていると。」いうことである。
- 13) こういう諺において、「聖賢曰く」と付するのは、中世フランス文学英文学、を通じて、共通な表現法であって、チョオサーの「トロイラスとクリシダ」の第1巻、694 行にも用いてある。
- 14) 中世において、広く流布されていた諺で、Gesta Romanoum L VII. 420, Chaucer の Parl. of F. (140) にもある。
 “Th’ eschewing (=avoidance) is only the remedye.” (Parl. of F.)
- 15) ‘with civil and peaceable words’
- 16) 1) を参照。

- 17) 原文で, 'gentle & smale.' となっているが, この成句は, 中世文学において理想的女性に冠する形容句となっていた。例えばサロメが Cursor Mundi (1318) の中でこう描かれ, またチョオサーのアリスン(年老いし大工の女房)も, 同様に描かれている。
- 18) ここのところで, ニコラス先生の人となりが見られている。
- 19) 原文は, 'Wise & snepe (=fool)' とどのつまり, 'all the world' という意。
- 20) 梟が夜しか飛べないというのは次のような話がある。鳥類が集って, 彼等が見つけたバラの花を誰にやるか, 相談していたが, 梟が大笑いしたので, その決定が延期され, そこで, バラにうらまれて梟は夜飛べなくなったと云われている。
- 21) この諺を引用したのは, 詩人(作者)の懐いていた中世の傍観者の態度を示すもので, 梟が宗教的な立場にいることを示す。
- 22) 「林も小川も」を, 'bough' and 'bark' と解釈している場合もある。
- 23) 「よい目的でもって, 何物をも見ぬ邪惡な人は, 恰度, 梟の輩にたとえられ, そういった輩に属する人だ。」
- 24) Conltn 氏によれば, このところは僧院の生活を暗示しているという。
- 25) 'No gaping against an Oven' という諺がある。
- 26) アルフレッド大王の諺に,
「馬鹿者と喋べったり, 口裏を合わしたり, いさかたりするな。また氣狂い者といろんな話をしたり, いさかたりするな。」
というのがある。
- 27) この諺も, 英語にはよくある諺である。
- 28) 当時, アイルランドの僧侶は一般的にもっとも低俗であった。ラングランドの「農夫ピアス」にも論ぜられている。
- 29) 2) に述べたように, 聖務(祈祷)の時刻が夫々示されている。
- 30) 「過度」―「度を過す」ということについての諺はいろいろとある。例えば, Ancrene Riewle に, 'Eventhing may be done to excess: moderation is best in all things.' というのがある。
- 31) 以下, 一つまり, 357 行から 362 行まで, 梟は, 説教者の態度で話しをすすめている。
- 32) ここに現われているアイデアは, 大鴉, 狼とかか鷲とかが戦場の周辺を浮遊している場面を描写する古代英雄詩の手法に則っている。
- 33) この喩話は, 織物業の織方の技術から派生している。織物師が材料を準備す

るのに困っているのをせせら笑っている腹黒き者を云う。

- 34) 中世において、広く行われたもので、テナー部がメロディを歌い、他の二つのパートがそれにハーモニーさせる。中世英詩「ガウェイン卿と緑の騎士」, 1655 行を参照されたい。
- 35) 雄のナイティンゲールの啼声は、6 月にひなを卵からかえす時までしか聞かれないことを云った。
- 36) ここのところ数行にかけて、修道僧の慈善行為を言外に現わしている。